

御挨拶 住職 堤 俊翁

もう3月になりました。
毎日があっという間に過ぎ去って、ひとときもとどまってはくれません。
毎朝、本堂でお勤めをすることから私の1日は始まりますが、最近は音楽を流しています。
それは癒しの音楽です。それは、とてもいごちがよくて、その音を聞いていると心拍や呼吸が自然とおだやかになり、冥想に入りやすい音楽だということです。
これは、1月の御忌法要の時、布教にきていただいた山上上人のお弟子さんで、指圧師でもある遠藤 暁及という方が、お念仏をしている時に聞こえてきたメロディを曲にしたものです。
まさに、私達の心の深層に響くものといえるでしょう。
そうやって本堂にいと、阿弥陀様のまえから離れたくないような気分になります。
そんな時間を過ごせるお陰で、毎日が心豊かに送れるようです。
お釈迦様は、お亡くなりになるとき「私は喜びにつつまれて、この世を去っていく」とおっしゃいました。
足早に過ぎ去っていく1日1日を喜んで、送ることができれば、人生の最後も喜んでむかえられるのではないのでしょうか？
この喜びを一人でも多くの人に知ってもらいたいものです。
彼岸法要も間近となりました。
この機会に是非、本堂に参拝していただいて、実感して下さい。

三歸依文 三宝（仏、法、僧）に歸依する

- 南無歸依仏 ほとけさまに歸依します。
ブッダン、サラナン、ガッチャーミ（パーリ語）
- 南無歸依法 お釈迦様の教え、あるいは真理に歸依します
ダンマン、サラナン、ガッチャーミ
- 南無歸依僧 仏陀を信じ、仏陀の教えというものを信じている人間の集まりに歸依します。
サンガン、サラナン、ガッチャーミ

サンガ（僧伽）には「集まり」という意味があって「僧侶」という意味ではなかったということなのです。
また「サラナ」は「シェルター」つまり「防空壕」「避難所」ということで
ブッダン、サラナン、ガッチャーミは「仏陀という避難所に行きます」
ダンマン、サラナン、ガッチャーミは「仏陀の教えという避難所に逃げ込みます」
サンガン、サラナン、ガッチャーミは「仏教者の集まり、私はそこに逃げ込みます」ということなのです。
ですから、仏と法と僧に歸依するということは、「そこに逃げ込んだら世間の荒波が追いかけてこないよ」という意味でもあるのです。
今の社会を見渡しますと、大人も子供も世間の荒波に揉まれて、疲れています。
その荒波から逃れて、ほっとできる場所が「家庭」なのです。
「家庭」はそういう場所であってほしいのです。
勉強があまり好きでない子が、算数の試験で40点をとった。これじゃあだめだと自分から一所懸命勉強して、次回は60点とった。その子はよろこんで家に帰ってきて、答案用紙をお母さんに見せる。ところが60点の答案用紙を見て、現代のお母さんはほめたりしません。「隣の子は何点だった？」「80点だった」「なんであんたは60点なの。もっと勉強しないとダメじゃないの。塾に行きなさい。」なんて他人とくらべる。子供もたまりかねて「50点の子もいるよ」というと「他人のことはどうでもよしい」とこんな調子です。これでは避難所になるどころか、家庭からおいだしているのと同じことです。
平等にすることがだいじな社会にあっては、家庭の独自性は益々だいじになります。世間の物差はすてて、家庭が「サラナ」仏教者の集まりである「避難所」であってほしいものです。

（癒しの時間）へのお誘い

光輝く阿弥陀様の前、夜の本堂で、ほっとするひとときを

癒しの音楽とビデオ映写会

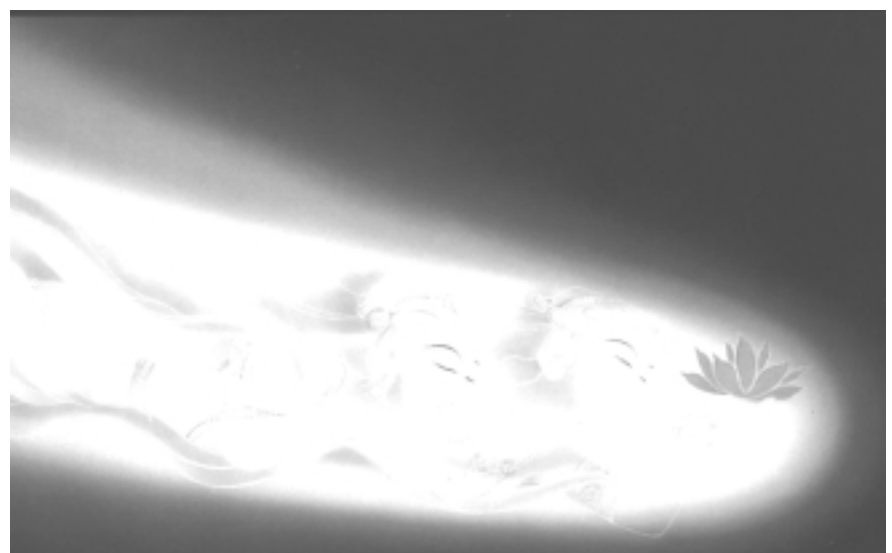
第1回

4月12日（木）

18:30より 癒しの音楽 『Ryokyu Endo』

19:00より ビデオ映写会 『リトル、ブッダ』

若い方々にも是非参加していただきたい催しです。



奈良県香芝市 正福寺住職 別府 空由上人

「学と行におもいを寄せて」

出家の縁に恵まれて仏弟子とならせていただき初々しい頃、仏教を学ぶということと、仏道を修行するということを考えさせていだいた。宗教書即ち仏教書を読ませていただき、掃除・勤行・作務と規則正しい日々であった。テレビ・新聞・ラジオとは無縁の日々が過ぎて行った。

今考え見つめると、私達の地球の上には様々な生き方をしている人間社会がある。文字とことばがあり道具を用いたという事が文明であるならば、時間の経過が文化を育てたのだと思える。一つ一つの出来事を文字に残すということの積み重ねが次々と思考を進める上に欠かせないと思う。積み重ねられた記録を学び、思考を進めて行くということを学問というならば、私達は学問をするということが人類の進歩発展に欠かせない事と思う。

この様な形を取り続けるならば、二十世紀迄の歴史と科学の進歩、積み重ねの意義が理解し易い様に思える。

学問するということは、人間に大切な方便であると思う。然し表があれば裏もある道理から、心正しからず弱い人が学問を自分だけの為に用いるならば悪い結果になることがあ

る。この場合は問題であろう。人間には心の正・不正・強い・弱いがある。全ての人に平等という思いやりが時として不幸な結果を招くこともある。そうならない為には宗教と信仰が必要不可欠な要素として人間社会に求められる。平等心より全ての人に教育が必要とされるのであるが、宗教者・教育者の真の何たるかが自覚されていなければいけないことと思う。学問も目的と方法に依って答えを導き出し、その答えが普遍的な答えでなければ、学問する人に目的と方法と答えを見窮める目が必要ならば、学問とそれに依る知識は活きて来ないのである。又方法を間違えたとんでもない答を得ることもある。こういう事を考えると一人の人間の認識の高さということ

がとても大切なことになる。見識が宗教心と信仰心に依ってなる人が人間社会に大切な人ではなからうか。学問する人の心がとても大切なことであると思える。行ということについても全く同様なことを考えねばならない。この場合は良き師・経験者・先達という人に恵まれて、指導を仰がねばならない一般的には経験豊富な指導者にたよらねばならない。

人間が人間として完成して内在せる神佛の域を発現出来るか否かは、学問の師と行の師に恵まれねばならないと同時に自分自身で自立出来る心の強さに恵まれていなければならぬ。釈尊やキリストのような人は宗教的天才と呼ぶべきであろうが、共に師に学び自ら行じて、強い心に支えられて独尊となられて

いる。内在せる精神の秘奥を発現出来たという事は、一体何に依ってであろう。強い心を信仰ということばに置き換えてみると神仏への感謝報恩の心が空間に力を及ぼす時、不可思議な功德というか、力が働いて来るように感じられる。正に天地創造の源初の目に見つめられているような幸せを感じるのである。この幸せから発せられることばこそ、我ら人間を活かす教えであろう。

「引用(考えて見よう)」

竜樹菩薩阿弥陀佛と共に常に浄土に居す

浄土教とは極楽証拠の釈迦如来に依って明

されたる法門なり、釈迦如来の後は竜樹菩薩

をもつて極楽の人(証拠)と為す、弟子天親

菩薩をもつて浄土教と名づく、曇鸞は竜樹・

天親の両菩薩に学びて南無阿弥陀佛の本願に

到る。善導大師に依りて南無阿弥陀佛の口称

三昧発得が証されて法然上人がここを以て浄

土宗をたつる。阿弥陀佛は観佛三昧経を道

(縁)しるべとなすべく、極楽は各種の行法に

依り自得せられたるなり、其の方法に数々あり、○ 四諦、 八正道、○ 六波羅密、

七覚支、○ 十二因縁、○ 三十七道品、 観仏三昧、 念仏三昧、 禅定、

礼拝、 懺悔、○ 六念、○ 十善業、 等々々々

これら法の内で口称念仏三昧は天親菩薩

と曇鸞大師の間にて出来るのであろうか?

口称念仏三昧は善導大師の実修に依り実を結ぶ、然れども善導に於いては竜樹・天親の行法の如何に実修せられたり、我朝の恵心僧都はこの観点を実修せられたる人なり、善導大師と恵心僧都のみ浄土教の中にては大切に心して学ぶべきなり、法然上人の如くに

我一人「さとり」たるは、これ一切衆生を

済度せんが為なり、深き佛の慈悲を体として

神変不可思議功德を具現せんは、これ一切衆

生をして「信」を生ぜしめんがためなり。

十方に浄土多けれど、我西方極楽浄土の阿

弥陀仏のみもとに生ぜんことを願う。

阿弥陀仏とは人なり、阿弥陀経とは法なり、念仏往生法、念仏三昧

我等の歸する処、往生する処は極楽浄土、

極楽浄土の教主は阿弥陀如来、故に所歸極

楽、往生法念仏、信阿弥陀仏がはっきりしな

ければならない。極楽の確信(念仏往生法)、

阿弥陀仏の確証(念仏三昧)

念仏往生法たる念仏三昧に依りて阿弥陀仏

の確証を得て、これより極楽の確信を得る。

念仏三昧は行

阿弥陀仏は信

信なくば行なく 行なくば信なし

明確になければならない